

いのちをいただく

1 主 題 いのちの大切さを学ぼう

2 主題・教材について

現代社会においては、「死」すなわち命が失われる場面を体験することが少なくなっている。子どもたちの中には、ゲーム等のバーチャルな世界で、命が簡単に失われ、そして、その命がいとも簡単に復活するという現実ではあり得ない経験をすることが多い。そのような中で、本当は一つしかないかけがえのない命の重みが薄れてしまっているのではないだろうか。その結果、社会においては、ともすれば命を失うことにもつながりかねないいじめや虐待が跡を絶たない。そんな今だからこそ、子どもたちには「生」と「死」、命の大切さにしっかりと向き合わせたい。

私たちは、スライスされ、食品としてパックに包まれた肉を、あたかも元々そうであったかのように店頭等で購入し食べている。その時、「いのちをいただく」という一瞬をみんなで、生きものが食べ物になるということに思いを巡らせることは少ないと思われる。

この教材は、店頭に並ぶ精肉が、つい何日前まで生きていた牛であったことを改めて私たちに思い出させてくれる。さらには、精肉の過程において、そこに携わる人たちの真剣に命と向き合う姿や、命を無駄にせず様々な形で生活に利用する工夫にも目を向けさせてくれる。

学習を通じて、私たちは多くの命をいただき、それらの命に支えられて生かされているのだということに気づき、命の尊さに対する考えを深めさせたい。そして、そのことにより自分の周りの一人一人の命を大切にする行動へとつなげていきたい。

(関連教科・領域：技術・家庭、道徳)

- ## 3 ねらい
- ・「いのちをいただく」営みがあって、生きものが食べ物に変わることを再確認する。
 - ・動植物の命をいただくことで、人間は生かされていることを認識する。
 - ・自分の周りの一人一人を命をもった存在として大切にできる。

4 展開例

過程	主な学習活動	指導上の留意点	備考
導入	「いただきます。」について考えよう。		
	・本文(P.30、31)の写真を見ながら、なぜ食事の前に「いただきます。」と言うのか、どのようなことを思っているかを考え、発表する。	・命を「いただく」という意味が込められていること、そのことを意識して言っているのかということなどを考えさせたい。	
展開	牛が精肉になるまでの過程から考えよう。		
	・本文(P.32～P.37)の写真を見て、何をしている場面かを考えながら、感じたことを出し合う。 ①牛の頭をハンマーで叩き、気絶させる(※¹ノッキング)場面(P.32) ②頸動脈を切り、体中の血を抜く(放血)場面(P.33) ①皮をはぐ場面(P.34)	・1枚ずつの写真について解説を加える。 ・仕事に携わる人の思いなど(「苦しませたくない」「1度で倒さない」と自分の命が危険である)を伝える。 ・現在は、この方法でのと畜は行われていないことを押さえる。 ・ここまでの作業をいかに手際よく行うかで、肉の品質が変わることを伝える。 ・衛生管理上、3人の獣医師が付き添っていることに着目させる。 ・品質の良い肉にするため手際よく進	資料

展 開	④内臓を取り出す場面（P.35） ⑤～⑦様々な部位がそれぞれ食品等になっていく場面（P.36、37）	められていることを伝える。 ・ 高い技術で肉や皮を傷つけぬよう、作業していることを伝える。 ・ いただいた命を無駄にしないために、内臓だけでなく、※²骨、血、皮等、あますところなく大切に利用してきたことを押さえる。 ・ 1 時間ほどでそれぞれの部位の肉やモツ（内臓）に切り分けられること、また、冬でも冷たい水で丁寧に洗う作業であることを伝える。	
	「いのちをいただく」仕事に携わる人の生き方から考えよう。		
	・ 本文（P.38、39）の写真を見て、仕事に携わる人の思いや願いを考え、話し合う。 ①命をいただいた牛の霊を慰めるために建てられた獣魂碑（P.38） ②2013年3月まで、牛の飼育からと畜、精肉までを一家で営んできた北出精肉店の皆さん〔左から、北出新司さん、弟、妻、姉〕（P.39） ・ 「いのちをいただく」ことについて意見を交換する。	・ 命を大事にしてきたこと、命をいただき、人々の命を支えるための営みを続けてきた仕事に対する誇りを感じ取らせたい。 ・ なぜ、牛を「殺す」ではなく「割る」という言葉を使うのかについても考えさせたい。	資料
ま と め	命を大切にする生き方について考えよう。		
	・ 本文（P.32～P41）を読み、「私たちは、生きている。」から感じたことや考えたことについて意見交換を行う。	・ 命の大切さを再認識し、自分を含めた一人一人を大切にするを考えさせる。	

※1 教材は、2012（平成24）年3月に行われた、と畜の様子を記録したものであり、現在は、銃のような器具を用いて、頭部に衝撃を与えて意識を消失させる方法で行われている。

※2 「鳴き声以外は無駄にしない」とされていた牛であるが、現在は、BSE対策として、背柱をはじめ、頭部や脊髄などは焼却処分される部分があり、血液も使用されていない。

▶参考となる文献◀

農山漁村文化協会 本橋成一 文・写真『うちは精肉店』

西日本新聞社 内田美智子 文・諸江和美 絵・佐藤剛史 監修『いのちをいただく』

《資料》

作者・北出新司さんの話から

牛は美味しい肉になろうと育っているのではなく、人間の都合で品種改良されたり格付けされているだけで、牛は牛で、牛の命を生きているわけだから、その命をいただく以上は良い肉であろうと売りにくい肉であろうときっちり食べてあげるとというのが、少なくとも牛に対する誠意みたいなものではないのかと思う。

生きものの命をいただき、それが自分の血や肉となり生きている。だからこそ、『いただきます。』に込められた意味をしっかりと考えたい。

と畜は、牛を「殺す」とは言わない。「割る」や「さばく」と言う。それは、「命をいただく」ことで自分たちの命や生活が支えられていることへの感謝の念であり、尊敬の気持ちでもある。

と畜や精肉は「命をいただき、命をつなぐ」仕事である。

今のと畜は分業化されていて、物を処理していくという感覚で、命をいただいているという気持ちがあまりないかなと思う。それでも、と場で働いて牛を潰^{つぶ}していることに関しては忌避意識があって、友だちや家族にも、と場で働いているという話ができない人もいます。偏見は根強いものがあるだろうと思う。生産者が牛を飼ってそれがお金に替わるのがと場なわけで、それを通らなければ自分たちは生活できないし、消費者の口にも入らないのだけれど、それについては、見過ごされているところがある。

この教材には、原始的だけどハンマーで牛を倒して、喉を切って血を出し、皮を剥ぐというシーンが出て、ショックを受けた人もいると思うけど、牛も豚も魚も生き物はみんな生きていてその命をいただいているということ、そして、と場に関わる差別の問題というのが浮き彫りにされているのではないかなと思う。